

遠藤周作『深い河』論

－旅を通して美津子に託されたもの－

李英和*
kami-ai@hanmail.net

＜目次＞

- | | |
|-------------|----------|
| 1. はじめに | 3.2 洗礼意識 |
| 2. 旅の準備期 | 4. 旅の実体期 |
| 3. 旅の移行期 | 5. 結び |
| 3.1 女神との出会い | |

主題語: 旅(Journey), 自我(ego), インド(India), 内面の変化(Internal transformation), 母性(maternal)

1. はじめに

遠藤周作の『深い河』は1993年6月、講談社から刊行された。全13章で構成されている『深い河』は、複数の登場人物と彼らの抱えるエピソードがそれぞれ独立した話によって展開する。遠藤は自分の死後、『沈黙』と『深い河』の二つの作品を棺に入れてほしいと頼んだという¹⁾。カトリック作家としての年来の課題のすべてを掲げた「総決算というべきもの²⁾」と評価されているとおり、『深い河』は遠藤の文学世界の全般を理解するのに欠かせない作品であるといえよう。

従来 of 先行研究では、遠藤の小説の「種明かし」や彼の他の作品やエッセーなどで述べられてきた発言などがそのまま論じられてきたものが多い。しかし近年になりようやく遠藤文学の宗教性・歴史性を相対化しようとする研究が現れ出した³⁾。そうした中で、美津子に焦点を当てた最近の先行研究は、次のようなものがある。

* 城西国際大学韓国文化研究センター研究員

1) 遠藤周作(1997)『『深い河』をさぐる』文春文庫、p.235

2) 佐藤泰正(1999.5)『『深い河』再読』『キリスト教文学研究』第16号、日本キリスト教文学会、p.26

3) 荒瀬康成(2005.9)『遠藤周作〈研究動向〉』『昭和文学研究』第五一集、笠間書院、p.88

「〈聖なる河〉であり〈母なる河〉であるガンジスを、〈深い河〉と感じるのは成瀬美津子」⁴⁾であるとか、「大津の生き方を通して超越的存在に触れていたこと、彼女がやがてその愛の受け継ぎ手として関与していく可能性を物語っている」⁵⁾、美津子は「大津を目標としながら、その果てにある超越的なもの(X)の働きを心に感じるという目的を達することができた」⁶⁾といった評価が下されている。また、さらに美津子の中でチャームンダーのイメージが大津と重なっていく点に注目して、そこに「ジェンダーは不在である。ここに母性の在り方の新たな可能性が提示されている」⁷⁾という見解を示しているものもある。

しかしいずれも美津子を中心にして展開していったものの、「母なるもの」に収斂されていったものが多い。

そこで本稿では、遠藤が作品の中で持ち続けてきた様々な主題の中から成瀬美津子(以下、美津子と称す)が担っている機能について絞っていき、美津子の内なる旅の旅程を準備期、移行期、実体期の三つに分けて捉え、各々の過程の中で美津子が経験する自我の変化について注目して、『深い河』の中で美津子に託されたものは何であるかを考察する。

2. 旅の準備期

成瀬美津子(以下、美津子と称す)は最初、「一章 磯辺の場合」に入院中の磯辺の妻を世話するボランティアとして登場する。次にそれから数年経った、二章のインド仏跡ツアーの説明会の場面で磯辺と再会することによって物語が進んでいく。

しかし、『深い河』は過去に遡って物語が進んでいくという仕掛けが組まれているので、出来事の流れに沿って進むと物語の始まりは、美津子の大学時代に遡る。

美津子の回想によると、彼女が大学に通った時期は1960年代の後半から1970年代のはじめ頃であることが推察でき、さらに彼女の大学時代も垣間見ることができる。

大学時代に『モイラ』気どりで多くの男の友達と付き合っ、お酒を飲んだり、セックスをしたりして振舞う日々を過ごしていく彼女は、自分の心の空虚さのゆえに同じ学校の

4) 遠藤祐(2000)「ガンジスの流れに向けて—『深い河』の美津子と大津—」『玉藻』第三十六号、p.89

5) 古浦修子(2013)「遠藤周作『深い河』論—美津子の魂の旅程における〈母なるもの〉の内実—」『遠藤周作研究』第六号、p.42

6) 後藤恒允(2009)「遠藤周作『深い河』試読—成瀬美津子像を中心に—」『聖霊女子短期大学紀要』第37号、p.33

7) 荒井英恵(2001)「遠藤周作『深い河』における美津子像—もうひとつの物語—」『同志社国文学』55、p.65

津を遊び心で誘惑して弄んだ後、棄てる。その後、自分の人生の空虚から逃れようと思って結婚をするが、夫との間で何の連帯性も持つことができなかつた彼女はさらなる空虚を感じてまもなく離婚する。その時の彼女の心情はフランスの修道院にいる大津宛に送った手紙に伝えている。美津子に棄てられた大津は、神父になろうと思ってフランスの修道院にいつている設定になっている。美津子の大学時代の様子や時代背景が垣間見られるところの一節を紹介する。

その頃はこの大学を一時、ゆさぶっていた学生運動もようやく下火になって、大半の学生が空虚感に襲われていた時代だった。(p.191)

彼等は四、五年まえの世代を駆りたてていた学生運動のような目標を喪い、虚ろな生活を何か刺激的な事で誤魔化していた。そのくせそれらの行動が、空しさの上に更に空しさを重ねる事も知っていた。(p.194)

上記の箇所から、1970年代のはじめ頃の時代背景を垣間見ることができるが、自分とは何者なのかを一人自分自身の中で探そうとしたのが、1970年代の動きであった。1970年代に入った頃から、自分が何ものなのか分からない虚しさとして、この探求は、サラリーマンや主婦の中にまで広く浸透しはじめ、「アイデンティティ」という言葉が流行し、ユングの影響を受けて人間の深層心理、無意識的心理に注目しようとする傾向も生まれていった。また、この時期は、女性の抑圧的な現実と、ジェンダー化された主体としての女性自我に対する認識が目覚めた時期でもあった⁸⁾。この時期に大学時代を過ごした美津子においても自分が気づいているかいまいかはともかく、このような時代の雰囲気や動きと無縁ではなかつたと思われる。このような時代状況から考えてみると、美津子は家父長制のイデオロギーが創り出した社会的慣習にとらわれない女性として読み取れるが、彼女のその後の人生を追ってみよう。

離婚した後もずっと渴きつづけていた美津子は、インドへのツアー旅行に参加する。その旅行の目的は彼女が強く否定するにせよ、それはどう考えても神父になってインドにいる大津に会うこと以外にない。しかし、そう見えてももう一步進んで考えてみると、美津子のインドへの旅行は自分探しの旅と捉えたほうが的確であると考える。

美津子は自分の過去を顧みるが、現実の自分の人生も過去と同じく虚しく、渴きを覚え

8) 内山 節(1992)『戦後思想の旅から』有斐閣、p.192

ているのだ。しかし、彼女はこの虚無の中で挫折するより、むしろ自分を洞察して「あなたは何を求めているの」「何を探しているの」と自問し、その答えが見つからず苦しむが常に答えを求め続ける。

美津子は慣習にこだわらない女性であって、経済的に余裕があり、社交的で、独立性もある。ところが、大学時代から正体不明な空虚を感じ、その空虚は歳月の流れの中でも消えない。美津子は自分が誘惑して棄てた大津が神父になってインドで働いていると聞いてインドへ向かうことになるが、大津を捜しにインドへ向かう美津子は大津に対する自分の感情を自らに説明しなければならぬ危機にぶつかっている。しかし、美津子は意識的には自分とは別の次元を生きる大津の生き方を無意味なものとして否定する。それにもかかわらず、彼女は世俗的な生活の中で空虚さを感じるたびに自分が棄てた大津に執着し続けるなかでインドへの旅を決心するのであった。美津子の旅に出るまでの成り行きを考えると、今まで何の意味もなかった自分の人生から脱して、何か意味あるものを掴もうとする試みであったと考える。それゆえ、美津子の旅を新しい自己への発見、あるいは、より意味ある人生に向かって進んでいくための、特別な儀式の一つとして捉えてもよからう。

今まで自己中心的に生きて来たにもかかわらず空虚さばかり感じていた美津子の人生は、インドへの旅を通してどう変わっていくのかその過程を見てみよう。

3. 旅の移行期

3.1 女神との出会い

この節では、美津子がインド旅行で経験する、ヒンズー教の女神が彫刻されているバガヴァティー寺院の訪問と、ガンジス河の中に体を浸す行為を旅程の移行期として捉えて述べてみたい。

「自分のなかのいやしがたい空虚と愛の枯渇」を感じ、「自分は一体、何を探しているのだろう」と自問し続ける美津子は大津がいるインドに旅立つ。

以下の引用は、『『深い河』の創作日記』の中で叙述されているヒンズー教の女神像についての箇所である。

ヒンズー教の女神像をみて両性具有、善なるものと悪なるものの共存を考える。彼女は次第にこれが人間と思う。しかしその人間を包む大きなものが欲しい。

『深い河』の中で、ヒンズー教の女神としてカーリーとチャムンダーについて描写されているが、上記の引用を見ると、遠藤は、ヒンズー教の女神像から、両性具有性を感じ取ったと推測される。ところで、この女神象に美津子が心を惹かれるのはなぜだろうか。さらには、現実の女性と女神とは、どのような関係にあるのかを考えてみたい。

若桑みどりは、欧米ではキリスト教、父権主義の反動から女神信仰への回帰・復権が認められたが、そのような流れの中でヒンズー教における女神崇拜が着目されるということも起こってきた。ヒンズーの女神が新たな女神崇拜の核となる理由として、ヒンズーのアイコンの中には両性的なものがあることが挙げられている。特に、女神カーリーは、創造と破壊、善と悪の一致が認められ、女性の潜在力をすべて包括する¹⁰⁾、と言っている。

『深い河』のインド仏跡ツアーの説明会の時、スクリーンにうつし出された女神カーリーは、片足で男の死体をふみつけ、四本の手のひとつでネックレスのかわりに数々の人間の首を肩にかけていた姿であった。添乗員の江波はカーリーについて次のように描写する。

これは印度の寺院や家庭でよく飾ってある女神カーリーの絵です。基督教の聖母マリアは優しい母性愛の象徴ですが、印度の女神たちは、たいいてい地母神と言いまして優しい神と共に怖い存在。(p.188)

カーリーは、女神のもつ両義性が極端な形で現れているため、フェミニストによる女神復活の典型として挙げられている。さらにカーリーは、生と死が交錯する世界、活動的な女性原理とそれを支える男性原理のあり方などを読みとることが可能である¹¹⁾。インド仏跡訪問に関心があるのでもない美津子の内心は、自分がインドで何を見たいか分からなかった。ところが、自ら「ひよっとしたら善と悪や残酷さや愛の混在した女神たちの像を自分と重ね合わせたいのかもしれないかもしれなかった」と思っている。その後、美津子が再びカーリー女神像を見ることができたのは、インドのホテルであった。彼女は本の中のカーリー女神の写真を見つめる。

9) 遠藤周作(1997)『『深い河』の創作日記』講談社、p.285

10) 若桑みどり(2000)『象徴としての女性像』筑摩書房、p.94

11) 若桑みどり、上掲書、p.12

女神カーリーは柔らかな眼差しで、両手をひろげ、こちらを見ている。口もとにも心なしか微笑をたたえている。そんな微笑みをたたえた女神カーリーが、裏頁では、血まみれの魔神ラクタヴィージャから生血を吸いとっているのだ。切りとった生首をかかぎ持ち、口唇には血がつき長い舌をだしている。(p.259)

美津子はカーリー女神の二枚の写真のどちらも自分だと思って、優しいだけではなく、怖い姿を持っているカーリー女神に再び自分を重ね合わせる。彼女は、同じツアーに参加した木口を看病するとき、「心の奥にひそむ破壊的なもの、ヒンズーの女神カーリーと同じもの」が胸をかすめると言っているところから、美津子が内面の空虚と自己破壊の衝動に駆られていることが窺える。そして、彼女は、まともや自分は何を探しているのだろうか、という問いを続けながら本当の自分を探し求めて「心の奥の闇を探る」旅を続ける。

美津子がインドへ来て、チャームンダー女神像があるバガヴァティー寺院を訪問することに注目したい。ツアーの一行は添乗員の江波が案内する女神像が立ち並んでいるバガヴァティー寺の地下に降りていく。バガヴァティー寺は、江波が人々にどうしても見せたいと思って用意したところなので、特別な意味合いを持っている空間として読み取れる。美津子は、「ねっとりした空気」「うす暗い地下の内部」の洞窟の石段をおりる時、「自分が今から心の奥に入っていくような気」がする。美津子がうす暗い地下に下ることが自らの心の奥の無意識の次元に踏み込むことであるなら、そこで美津子の心に映るものは無意識の世界に隠されていたものの投影である¹²⁾、という指摘は的確であると考えられる。なぜなら、美津子自身、この空間を「心の奥に入っていくような気がし」、「内視鏡で心の奥を覗くような不安と快感」を味わっているという記述から想定してみると、美津子の意識下の世界を表したに間違いのないと思うからだ。チャームンダー女神像の描写を見てみたい。

彼女の乳房はもう老婆のように萎びています。でも、その萎びた乳房から乳を出して、並んでいる子供たちに与えています。彼女の右足はハンセン氏病のため、ただれているのがわかりますか。腹部も飢えてへこみにへこみ、しかもそこには蠍が噛みついていでしょう。彼女はそんな病苦や痛みにも耐えながらも、萎びた乳房から人間に乳を与えているんです。(p.279)

彼女は聖母マリアのように清純でも優雅でもない。美しい衣装もまもっていません。逆に醜く老い果て、苦しみに喘ぎ、それに耐えています。このつりあがった苦痛に充ちた眼を見てやっ

12) 山根道公(1994)『『深い河』を読むー美津子の場合』『プネウマ第34号』日本文學とキリスト教風編集室、p.48

てください。彼女は印度人と共に苦しんでいる。(p.280)

このようなチャームンダー像の話聞いて美津子をはじめインド旅行に参加した磯辺と沼田、そして木口は、それぞれの心の中でそれぞれの思いにふけてその像に心をひかれる。どこかで、美津子はこの女神と出会う、どのような思いを抱いたのだろうか。彼女がチャームンダー女神像をみて、イザヤ書五三章の言葉を思い出したのは注目に値する。チャームンダー女神像をみた美津子には、イザヤ書五十三章で描写されているイエス像と女神チャームンダー像が重なり、大津のみすぼらしいしろ姿がかぶさるのである。

キャロル・クライストは、「なぜ女性には女神が必要か」という論文で、女神は女性の自立した力を正当化する象徴であると言って、父なる神という象徴が数千年にわたって家父長的態度を正当化してきたが、同じように、女神はフェミニズムの風潮や刺激を正当化する象徴である¹³⁾と論じている。上述したカーリーは、女神のもつ両義性が極端な形で現れており、フェミニストによる女神復活の典型として挙げられるのに最適な女神像であると思われる。ところが、美津子が、女神チャームンダーに心を惹かれることによって、カーリー女神の両義性は後ろ向きにされ、印度人と共に苦しんでいる印度の母なるチャームンダーが強調されたのではなかろうか。

つまり、美津子は、始めてカーリー女神をみて、自分を重ねて「これが人間と思う」ことによって、自分と和解することができたのではなかろうか。ところが、後にチャームンダー女神に心を惹かれ、イエスと大津を重ねる。というのは、つよい自我に縛られて生きてきた美津子は、自分と和解することだけではなく、チャームンダー女神像のもつ人間を包む大きなものに強い感銘を受けたと考えられる。言い換えれば、彼女は説明会の時に、「インドで何をみたいか」という自問に、「彼女には探したいものがあつた」と語られているが、この「共に苦む」チャームンダー女神こそが、美津子が探し続けてきたことであると考ええる。

3.2 洗礼意識

水は生成と消滅、死と再生という両極的象徴を持っているので、小説の中で重要な意味合いを孕んでいる。さらに、「水は無意識のシンボルでもあり、水に体をすべて沈めると

13) キャロル・クライスト(1998)「なぜ女性には女神が必要か」『女神』田中雅一編、平凡社、p.8

は、無意識の領域である魂の次元にまで下降することを意味している¹⁴⁾、と解釈されている。したがって、『深い河』の中の河のイメージが単純な設定に止まらないのは、エピグラフに引用されている「深い河、神よ、私は河を渡って、集いの地に行きたい」という、黒人霊歌からもうかがわれる。水はキリスト教教会で洗礼を受ける時に欠かせないものであって、美津子がガンジス河に体を浸すということは、非キリスト教徒がキリスト教徒になるための洗礼儀式をそのようなものとして捉えようとしていたと思われる。そうだとすると、ガンジス河は儀式に使われた水として理解してもよいと思われる。

さて、大津と再会した美津子は、大津が行き倒れた人たちの遺体を火葬場に運ぶ仕事をしているということがわかる。美津子は自分が目撃した老婆の死体にも女神チャームンダーが現われるだろうと思うようになり、また、どの死体にもそれぞれの人生の苦しみがあるということを思いやるようになる。美津子の心の変化が読み取れるところである。やがて美津子はサリ一姿で河の中に体を沈める。

でもわたくしは、人間の河のあることを知ったわ。その河の流れる向うに何があるか、まだ知らないけど。でもやっと過去の多くの過ちを通して、自分が何を欲しかったのか、少しだけわかったような気もする。(p.340)

信じられるのは、それぞれの人が、それぞれの辛さを背負って、深い河で祈っているこの光景です。(p.340)

その人たちを包んで、河が流れていることです。人間の河。人間の深い河の悲しみ。そのなかにわたくしもまじっています。(p.340)

ヨハネ福音において水は、肉と霊の結婚を表わす象徴であると言われている。美津子が河に体を浸したということは、彼女の内面の変化を意味するものではなかろうか。河に体を沈めた美津子は、自分の祈りが真似事であると言っているけれど、しかしその祈りは次第に本物の祈りに変わっていくのである。「新しい衣を着て、体を水に沈めるというのは、洗礼をも想起させる再生の象徴とも読みとれ¹⁵⁾」ると、言った美津子の行為に対する山根の解釈は、本稿の上述の解釈と一致するところが多い。すなわち、美津子がガンジス河に体を浸すという行為は、洗礼意識として捉えられると考える。しかしこの時、洗礼の行為は

14) 山根道公、上掲書、p.59

15) 山根道公、上掲書、p.59

宗教的儀式とは関係なく、自我中心的思考から他者認識を通して自分を見つめることのできる存在へと生まれ変わるための儀式として捉えるべきであると考ええる。

4. 旅の実体期

さて、ここで、美津子が自我中心的思考から、他者認識に至る過程をもう一度振り返ってみたい。家父長制の支配イデオロギー¹⁶⁾を拒否しながら、生きてきた美津子であるが空虚から脱することができない。美津子の自我中心的な思考は、インド旅行を通して経験するさまざまな出来事や、彼女の世俗的な生活と反対の人生を生きていく大津に会ってから変化をみせる。

今まで美津子は、自我中心の生活をして他者の存在を理解しようとしなかった。自分がボランティアで世話をしていた、死をむかえている磯辺夫人にも、心を開かなかった。ボランティアは、ただ自分の満足のためであった。インド旅行説明会で会った磯辺に声をかけられたときも、自己中心世界に閉じこもってしまい、話を交わすのを避けたのだった。ところが、美津子はインドで、旅行に参加している人々の話を聞いて、はじめて他人のことを真に理解しようとする気持ちになる。いわば、美津子は今まで自我中心的な思考をもって他者への思いやりの気持ちがなかったが、インド旅行で他者を理解し、思いやる気持ちが芽生えるきっかけになったといえよう。また、今まで無能であって、失敗した人生であると思っていた大津の生き方に対しても、インドで会ってから、初めて彼の生き方を認めるようになった。美津子が大津を認めるようになったのは、醜く痩せ衰えたチャームンダー女神像に大津を重ね合わせ、また、十字架のキリスト像に大津を重ね合わせてみた後であった。醜く痩せ衰えたチャームンダー女神像、そのものは、イザヤ書53章の「醜く、威厳もない。みじめでみすばらしい」十字架にかけられたイエスのイメージを呼び覚ますのである。美津子は、ヒンズーの女神チャームンダーの「らいにただれ、毒蛇にからまれ、痩せ、垂れた乳房から子供たちに乳を飲ませている」姿を見て、「気だかく品位あるヨーロッパの聖母とはまったく違っていた」ことがわかった。さらに、女神チャームンダーを「現世の苦しみに喘ぐ東洋の母」として理解している。すなわち、今まで自己中心的な

16) 家父長制社会で生産された女性のイメージは、その社会における女性を描いたものであるというよりは、女性はその社会でどういう意味・役割を帯びているかという、女性をめぐる社会関係を独自のやりかたで表象している。(若桑みどり(2000)『象徴としての女性像』筑摩書房、pp.4-5)

生き方をしてきた美津子であったが、旅を通して東洋の母性的世界を経験して、また洗礼という儀式を通じて自分の内なる母性に目覚めていったと考える。

5. 結び

『深い河』の成瀬美津子は、遠藤周作の作品のどの主人公にも見られない変容、あるいは成長する女性として見て取れる。女性の変容とはジェンダー文化の中で規定され、規範された女性なるものからの内なる脱却だと考えるが、その脱却が遠藤の理想の女性像—母なるものの体現者—とどのように関わってきたのかを探ってみた。

美津子は大津に会いにインドへ旅立ったのであるが、そこで彼女の心を突き刺さったのは、「ガンジス河」と「女神チャームンダー像」であった。そもそも美津子の旅そのものは、彼女の内的な変容をもたらすために用意された措置であって、美津子の変容はインドへの旅程の中で顕現される。いわば、遠藤は美津子にインドで東洋的世界を経験させることで、美津子という現代女性に母なるものを期待していたと考える。すなわち、遠藤の母性へのこだわりは、『深い河』でインド旅行という設定を用いて、日本の母なるものから、さらにはそれをも超えるすべてを包む母なるものを美津子に見事に託したといえよう。

しかし、それにもかかわらず、遠藤のあくなきまでの母性へのこだわりは、ジェンダー文化を捉えるための道をふさいでしまっていると考えられる。母性憧憬は女性をジェンダー文化の外部へ導くのではなく、そこに再び位置づける道すじでもあるからだ。美津子の変容を描く遠藤周作の作家としての認識の変容に感動しつつも、やはり、母性の理想化に遠藤の限界を見てしまうのである。

論文中に引用した遠藤周作の小説は『遠藤周作文学全集』(全15巻、新潮社、1999年—2000年)に拠った。

【参考文献】

- 荒井英恵(2001)「遠藤周作『深い河』における美津子像—もうひとつの物語—」『同志社国文学』55
 荒瀬康成(2005)「遠藤周作〈研究動向〉」『昭和文学研究』第五一集、笠間書院
 内山 節(1992)『戦後思想の旅から』有斐閣

- 遠藤祐(2000)「ガンジスの流れに向けて—『深い河』の美津子と大津—」『玉藻』第三十六号
遠藤周作(1997)『「深い河」をさぐる』文春文庫
遠藤周作(1997)『「深い河」の創作日記』講談社
遠藤周作(1999)『遠藤周作文学全集』(全十五巻)、新潮社
古浦修子(2013)「遠藤周作『深い河』論—美津子の魂の旅程における〈母なるもの〉の内実—」『遠藤周作研究』
第六号
後藤恒允(2009)「遠藤周作『深い河』試読—成瀬美津子像を中心に—」『聖霊女子短期大学紀要』第37号
佐藤泰正(1999)「『深い河』再読」『キリスト教文学研究』第16号、日本キリスト教文学会
山根道公(1994)「『深い河』を読む—美津子の場合」『プネウマ』第34号、日本文學とキリスト教風編集室
キャロル・クライスト(1998)「なぜ女性には女神が必要か」『女神』田中雅一編、平凡社
若桑みどり(2000)『象徴としての女性像』筑摩書房

논문투고일 : 2014년 09월 10일
심사개시일 : 2014년 09월 20일
1차 수정일 : 2014년 10월 08일
2차 수정일 : 2014년 10월 14일
게재확정일 : 2014년 10월 19일

 <要旨>

遠藤周作『深い河』論

- 旅を通して美津子に託されたもの -

遠藤が作品の中で持ち続けてきた様々な主題の中から成瀬美津子が担っている機能について絞っていき、美津子の内なる旅の旅程を準備期、移行期、実体期の三つに分けて捉え、各々の過程の中で美津子が経験する自我の変化に注目して『深い河』の中で美津子に託されたものは何であるかを考察した。『深い河』の美津子は、遠藤周作の作品のどの女性主人公にも見られない変容、あるいは成長が見て取れる。そもそも美津子の旅そのものは、彼女の内的な変容をもたらすための措置であって、美津子の変容はインドへの旅の旅程の中で顕現される。

いわば、遠藤は美津子にインドで東洋的世界を経験させることで、美津子という現代女性に母なるものを期待していたと考える。すなわち、遠藤の母性へのこだわりは、『深い河』でインド旅行という設定を用いて、日本の母なるものから、さらにはそれをも超えるすべてを包む母なるものを美津子に見事に託したといえる。

The theory of the Deep River by Endo Shusaku

- The entrusted to Mitsuko in the course of journey -

In this essay, I have focused on the role played by one of the protagonists, Mitsuko Naruse, in Shusaku Endo's novel *Deep River (Fukai Kawa)*. *Deep River* traces the journey of a group of Japanese tourists on a tour to India. Mitsuko's sense of self-transformation and improvement through the journey to India is unique among the female protagonists in Endo's work. Her internal transformation becomes manifest during her physical journey in India, and I have examined what Mitsuko is given in the three periods of her internal journey: the preparatory period, the transitional period and materiality period. In the final analysis, Endo's obsessiveness with maternal affection has provided Mitsuko with a maternal role, surrounding the universe with her affection, superbly realized through the situation of the journey to India.